

ホシガリ

渡 部 ほのか

（その夜、私は彼女と一緒に星を狩りに出かけたのです。）

序 章

それは少し雑な彼女の字で書かれた古い日記。寄宿舎の反対側の机で青い表紙の分厚いノートに、夜毎日記を書いていた彼女の姿を思い出す。もう十年以上前になる。

バラバラと最初のページへ戻るとちやうど彼女が寄宿舎へ来た日のことが書いてある。勝手に読んだら怒られるとわかっているけれど、これだけ時間が経っていたら時効だよ、と自分に言い聞かせて彼女の家から持ち出し、こっそり拝読させていた。だくこににしたのだ。

開いた窓から吹く涼しい風を浴びると、あの頃の記憶が一気に

流れ込んでくる。

第一章

初めて彼女を見たのは、寒い冬の日だった。

雪の積もった道をざくざくと踏むのがなんだか楽しくて、いつもより時間をかけて歩いていった。凍えそうな寒空の下、一人で鼻歌なんて歌って。

校舎から寄宿舎へ戻る途中ですれ違ったその少女は薄い唇を真一文字に結んでいて、随分と大人びて見えた。長い髪がさらさらと冬の空気を切って、瞬きをしない目は真っ直ぐに前を見つめていた。

……誰だろう？

コートの下に学園のものではない制服を着ているから、外部の

人間なのは確かだ。日にち的に受験生ではなさそうだし、と考えているうちにその姿は校舎の中へ消えてしまっていた。

やけに物憂げな彼女の横顔が忘れられなくて、また会えたら今度は話しかけようと思つて決めていた。わたしの中にこれだけ印象を残したのだから、わたしのことも知つてほしかった。

だから進級と同時に変わった寄宿舎のルームメイトが転入生だと聞いたときに、なんとなくだけどの長い髪の少女なんじゃないかと思つたのである。

わたしの不思議な予感的中で、カラカラとトランクを引く音がして部屋のドアが開いた向こうには、あのとときの少女が立っていた。

「初めまして。今日から三二二号室のルームメイトになる織部美です」

初めて聞いた織部さんの声は思つたよりも可愛くなかった。可愛くないと言うと語弊があるか。どちらかと言えば大人っぽい、硝子のように高く透き通り、それでいて落ち着きのある声だった。

よろしくお願いします、と彼女が頭を下げると、黒く長い絹糸のような髪がさらりと零れた。髪の動きまで目で追つてしまう。

「よろしくつ。わたし、夏堀緋奈子。クラスも同じ一年桃組だから、いろいろ聞いてね」

やつと知つてもらえた。そのときのわたしは、それが嬉しくて嬉しくて、きつと頬が緩んでいたと思う。

「あ、ありがとう……」

織部さんはわたしの勢いにたじろぎつつ小さく頷くと部屋に入り、トランクの荷解きに取り掛かった。手伝おうかと迷つたけれど、厚かましいルームメイトだと思われては今後に響くのでやめておいた。少なくとも彼女にとつては初対面の他人に、いきなり自分の荷物を見られるなんて嫌だろう。

あまりじろじろ見ないようにと、スリッパを脱ぎ、木造のベッドに仰向けになつて天井を見つめた。部屋の外に出るときに靴を履けばいいように、ドアの手前に簡易な玄関があり、わたしは室内では薄ピンクのスリッパを履いている。

寄宿舎はベッド以外も木造部分が多く、床や机ももちろん木できていて、初めて見たときにはコテージみたいだと感じたことを思い出す。部屋の真ん中に大きなクローゼットがあり、窓のそばの小型冷蔵庫とそれだけはルームメイトと共有なのだが、本棚や机は各々に与えられていて左右の壁際に並んでいる。互いのプライベートをあまり邪魔しない造りになっているのだ。

ちなみにテレビは個人で持ち込みが許されているため、存在す

る部屋としない部屋がある。わたしはテレビよりラジオが好きなので、テレビはないけれど小さなラジオを机の上に置いていた。

「あの、夏堀さん」

声をかけられて首だけ左を見る。癖のあるショートヘアが枕に擦れて絡まった気がした。

「なに？」

「夏堀さんは春休み、帰省しなかったの？」

質問してくれることは、少なくともわたしに興味を示してくれてるってことだ。ちょっとわくわくしながら答える。

「帰省したけど、新しいルームメイトが来るっていうから早めに戻って来ただけだよ」

「あ、私のせい……」

「わたしが気になっただけだから気にしないで。あと、せっかくだしわたしのこと名前で呼んでくれたら嬉しいな」

この子から名字で呼ばれるのはなんだか不自然、そんな気がしていた。

織部さんは少し首を傾げてわたしを呼ぶ。

「緋奈子さん？ 緋奈子ちゃん？」

「堅い。ひなでいいよ」

「ひな、ちゃん」

言っただけでわたしの顔をちらりと見て反応を気にする仕草が、小さな子どものように見えた。すぐくしっくり来る。まるで何年も前からそう呼ばれていたみたいに、彼女の声の響きは自然で懐かしかった。

「うん、それでいこう。ねえ、もしよかつたらわたしにも名前前で呼ばせてくれないかなあ？」

いいよ、と頷く彼女にわたしは元氣よく呼びかけた。

「奏美ちゃんっ」

押し付けがましい気もした。でも、奏美ちゃんは微笑み返してくれたから、多分大丈夫だ。わたしと織部さんは、こうしてわたしと奏美ちゃんになった。

寄宿舎は大きな大きな建物で、一つの建物内に食堂や談話室、ランドリーや大浴場、お御堂までもが存在している。私立白鷺女子学園は全寮制の中高一貫校であり、千人以上の生徒全員が生活しているのだから当然かもしれないが。

学園と寄宿舎は、都心から少し外れたのどかな町の小高い丘の上に建っている。人形のごとく大切にされている少女たちのためだけに作られた巨大なドルハウス。それは、市街地とは隔離されたように静謐な空気を纏った場所だった。

教師たちは麓の町の職員寮に住んでいて夜には丘を下りてしま

うため、寄宿舎には学園を經營する教会から派遣されたシスターと、食堂や掃除などを助けてくれる寮母さんたちがいてくれる。

「洗濯は時間決まってるけど、食事は決まってる、食べるなら朝は六時から八時、夜は十八時から二十時までの間に行くの。お休みの日のお昼は十二時から十四時だよ」

そのくらいの説明なら奏美ちゃんはとつくに受けているけれど、わたしは寄宿舎を案内しながらべちゃくちゃと喋った。彼女の家のことを聞くのがなんとなく憚られたし、わたしの家の話をするのもなあ、と思つたから無難に学校の説明をしたわけだ。

「ひなちゃん、ありがとね」

頬の高い位置、ちよつと珍しいところにくぼきを作つて奏美ちゃんは微笑んだ。わたしも嬉しくなつて微笑み返した。

（都会の喧騒と忌まわしいあの場所から逃げて、ようやく白鷺女子学園へ着いた。ここにいればすべてがうまくいくなんで思つてはいない。怖くて、不安だからで。でも誰かに悩みを言いたくないでなかつただけ。

中身を見透かされたらとびくびくすればするほど、体の奥がずうつと冷えて冷靜になる。自分のことではいいっぱいのはずなのに、まるで余裕みたいに振る舞う様子は滑稽で、それすらも

誰かに見透かされそうでもまた怯えている。これから始まる学校で、私はどれだけ取り繕えるのかな。

寄宿舎でのルームメイトは夏堀緋奈子さん。彼女のくるくるとよく動く大きな瞳や、自然と甘えたような口調の話し声が羨ましい。白い細面や柔らかな髪がまるで仔犬みたいで、愛されるために生まれてきたというのは彼女のような人のことを示すのだと思つた。

けれど、彼女は変わつていた。どこがってはつきりわからないけれど、なんだか周りとは違う世界で生きてみたいに見えた。「みんな」よりも私と同じ側にいる。直感がそう告げている。もしかしたら。もしかしたら彼女は……」

校舎は寄宿舎よりも未来的で、硝子張りの壁が多い。硝子にできないところは石の壁になっていて、光の溢れる場所と冷たく静かな場所がある。白鷺学園は一言で言えば学校っぽくない学校だった。

大きな図書室、真新しく見える机や椅子、可動式の黒板。吹き抜けみたいな玄関ホール。うつすらと青の入った黒地のセーラー服。漫画やドラマの中みみたいな学園なのだ。生徒は漫画の世界ほど「お嬢様」ではないが、麓の高校の生徒たちとは違う雰囲気

纏っている。まあ、それは世間に疎いというだけなのかもしれないけれど。

高等部に進学したとはいえ、新しく外部から入る子は少ない。ほとんどが見知った顔だ。だから奏美ちゃんは目立った。きつとどの世界でも転校生というのは目立つ運命なのだけれど、奏美ちゃんは長い黒髪に白いリボンなんて付けて、どこかの絵画から抜け出したみたいな見た目だったから余計に目立つ。

講堂での始業式ではみんな大人しくしていたけれど、式が終わり一年桃組の教室へ入った奏美ちゃんはたちまちクラスメイトに囲まれた。

「織部さん、だよね？ 初めまして」

「編入試験通るなんてすごいのね」

「寄宿舎は何階になったの？」

わたしは少し離れたところでドキドキしながら見ていた。十人くらいに囲まれて、奏美ちゃん、緊張してしまわないだろうか？ そんなわたしの心配をよそに奏美ちゃんは笑顔を見せる。

「織部奏美です。よろしくね。編入試験は他に受けた人がいなかったからラッキーだったのよ。寄宿舎は三階、夏堀さんと同室」
全ての質問にすらすらと答えている。なあんだ、わたしがいなくても平気だった。ほっとして自分の席に着くと、前の席に座る

茉宏ちゃんが振り向きながら話しかけてきた。

「緋奈子、つまらなそうな顔してるなあ」

深見茉宏ちゃんは学園生にしては砕けた、というか乱暴な言葉遣いをする。見た目もキリツとしていて、中身は優しいのに初対面だと相手に威圧感を与えるタイプだと思う。

「つまらなそう？ わたしが？」

「うん、つまらなそう。転校生の世話焼きたいんだろ？ キョロキョロ向こう見て。でも織部さんはむしろ緋奈子より世話焼きたいプだと思うっつーか、世話焼かれることに慣れてないって顔してるよ」

ふむ。茉宏ちゃんがそう言うなら多分そうだ。わたしは奏美ちゃんの世話を焼きたいけれど、奏美ちゃんはそういうのはいらない。とても残念だけど、茉宏ちゃんの人の見る目は鋭いからその通りなのだろう。

「そっか……」

ぼつんと呟くわたしの耳に奏美ちゃんの声が届く。

「ここに来る前は、えっと、都内の方にて……」

そうだったんだ、知らなかった。たまたま同じ部屋で話した回数が多いだけで、奏美ちゃんに関してのわたしと他のクラスメイトとの差はそれくらい。まだ知らないことだらけなのだ。

悔しいな。

「あはは、心の声が出てるよ、緋奈子。緋奈子はむしろ世話焼かれるタイプだからなあ」

うつ、痛いところを突かれた。不安なときにキョロキョロする癖を直そう。小さく決意した。とりあえず奏美ちゃんを見ることをやめてみたけれど、話す声だけがまるでスピーカーを通してみたいによく聞こえてきて、気になつて仕方がない。

わたしはもつと奏美ちゃんのことを知りたい。ただどなぜか奏美ちゃんにここへ来るまでのことを訊けないでいた。そのことを茉宏ちゃんに言うとかくすりと笑つて返される。

「緊張してんの？ それとも遠慮？」

「なんかそういうのじゃなくて、嫌な予感がするということか……」

「じゃあ調べるしかないじゃん、バレないように」

そんなストーカーみたいなことできないよ、と冗談にして笑い飛ばした。けれど頭の中ではそれしかないのかもしれないとも感じていた。奏美ちゃんは、美人だとか不思議だとかを超えた得体の知れないものを抱えている気がする。だから彼女を知りたい。知りたいけれど、ゆつくりでもいいかな、なんて思うのだ。だって彼女とわたしはまだ友達になつたばかり。

たとえ奏美ちゃんがどれだけ大きな秘密を抱えていても……。

最悪の事態を想定して、その上で距離を置くか。その秘密が何であつても受け入れる覚悟をするか。わたしは決められないでいた。放課後に一人、散歩をしながらうだうだと悩む。

相手を疑つても何もいいことないのに、自分を守りたくて、あることないこと想像して。わたしはいつだつてそうなのだ。

「ひなちゃん」

後ろから呼ばれて、背中に氷を入れられたみたいにひやつとした。考えていることがバレたんじゃなかつて思った。

「奏美ちゃん、どしたの？」

「そろそろ夜ご飯だから、一緒に行こうかと思つたんだけど、お部屋に戻つて来ないから探したのよ」

わざわざお御堂裏まで探しに来てくれたらしい。

「ごめんごめん、すぐ行こう」

声、震えてないかな。目の前できょとんとわたしを待っている彼女を、何か隠しているところな疑っている。そんなこと誰にも言えない。奏美ちゃんにも訊けない。

夜ご飯は白身魚の蒸し焼きと野菜炒め。寄宿舎のご飯はいつも美味しい。けれど今日ばかりは、あまり喉を通らなかつた。

「緋奈子、残すの？ これ以上痩せたら死ぬぞ」

食堂でたまたま近くにいた茉宏ちゃんが言ってきたけれど、今の精神状態で魚を半分も食べられたわたしは褒められるべきだと思ふ。

「緋奈子さん、私も心配ですっ」

茉宏ちゃんの新しいルームメイトである安斉が応戦してきた。

「安斉は茉宏ちゃんの味方じゃないからなあ」

「また緋奈子さんは名字で呼ぶ……。ちゃんと杏花きょうかと呼んでくださいよう」

ショートボブの毛先がふわふわ跳ねて、お人形みたいな顔が覗んでくる。安斉はあざといくらい可愛くて、同級生にも敬語で喋るから、後輩みたいにして仕方がないのだ。

「だって安斉は部下とか後輩っぽいんだもん」

「緋奈子さんの下に見えるのにー」

わたしと安斉のこのやり取りも、中等部の頃からだからもう三年ほどになる。そんなおなじみの茶番も、奏美ちゃんは初めて見る。どんな顔で見ていることかと彼女の方を振り向くと、奏美ちゃんにはやっと笑ってきた。

「なんか、ひなちゃんと安斉さん、少し似てるね」

思っていたよりも楽しそうだ。気さくにこんな笑顔を見せる奏

美ちゃんを、わたしは信じられないでいるんだ。そんなことを再び思い出して、一度いつものテンションに戻っていた心が暗く落ちていく。悟られないうちに部屋に戻りたい。無理矢理ご飯を飲み込んで、そそくさと部屋へ戻った。ルームメイトだから、どのみち奏美ちゃんも同じ部屋に帰って来るのだけれど。

三二二号室でわたしが机に向かってあれこれ考えている間、奏美ちゃんは自分の机で日記を書いていた。時間の流れは穏やかで、自分の中の迷いさえ忘れたら本当に居心地が良かった。お互いが黙って同じ空間にいても苦にならない。たった数日で奏美ちゃんはそんな存在になっていた。

（ここでは誰も私のことを知らない。私が何者なのかも、あの日々のことも、何にも知らない。テレビも見られるしネットも繋がるけれど、学園と麓の町との間、さらには町と都市の間には目には見えない大きな壁があるのだと思う。その壁を噂が越えることはなくて、だから私はここにいれば物珍しい転校生でしかなかった。普通の女の子になれる気がしていた。希望でしかないけれど、普通になりたかった。）

第二章

窓の外に目をやると、新月なのか雲が厚いのか暗闇が広がっている。春の闇はまだどうもむよように思考を溶かしてくる。眠気も手伝つて、わたしは今までのことが全部幻だったんじゃないかと思ひ始めていた。

「なんか眠くなつてくるし、お風呂行かない？」

静かな部屋には大きすぎる声で訊ねてしまつたけれど、奏美ちゃんは気にすることもなく頷いてくれる。

大浴場へ行くときのセット——着替えとタオルを持って、電気を消した。外からの闇に飲まれるように視界の全てが黒に染まつた。月が見えないとこれほど暗いものなんだ。やけにしんと静まつた空気に、呼吸が響く。

「……い、いや……」

それは細く震え、耳にやつと届くくらいの音量だった。

「いや、いやだ、来ないでっ」

続いてしゃくりあげるような声が聞こえた。様子がおかしい。次第に悲鳴にも似た叫びに変わる。

「奏美ちゃん？」

声の主を呼んでも返事はなく、代わりにすすり泣く声が聞こえ

るばかり。わたしは慌てて奏美ちゃんが立っているはずの部屋の中央に駆け寄つた。

「どうしたの？」

「助けて、お願い。私、全部忘れるから、お願いしますお願いしますお願いします……」

壊れた人形。茫然自失というか、自我がそこにはないみたいに奏美ちゃんは言葉を発していた。ガクガクと震えて蹲っているのだろう。泣き叫ぶ声は足元の方から聞こえてきた。

このままじゃ奏美ちゃんの姿が見えない。わたしはドア近くまで数歩戻つて、急いで電気を点けた。

ブラウンがかつた光の中に奏美ちゃんの姿が現れた。絶叫は治まつたものの、座り込んで肩を震わせて、ぼろぼろと涙を零している。

奏美ちゃん。呼びかけながら近付くと、今度は反応があつた。

「ひ、なちゃん……？」

泣き濡れた頬が蛍光灯に照らされて光り、切り揃えられた前髪の下で真っ赤になつた目が弱々しく見上げてきた。

「奏美ちゃん、ねえ、どうしたの？」

「わ、私……」

ほとんど吐息のような声で必死に話そうとする奏美ちゃんの背

中をさする。

「く、暗いのが、だめなの……。全部の明かりを消すのが、怖くて」

まだ先ほどまでの暗闇の記憶が抜けないらしく、肩を震わせている。そういえば奏美ちゃんは枕元に小さな電気スタンドを置いていて、よくよく思い出せば寝るときもそれを点けたままにしていた。

「どうして暗いのがダメなの？」なんて聞けなかった。彼女の口から語られるのを待たなければいけない。根拠もなく、そう思った。

「そっか」

こんなときに気の利いた言葉の一つでも返せばいいのだけど、わたしの口から出たのはそれだけ。

「迷惑よね、ごめんさい……」

ルームメイトの声が小さく萎む。まるで自分の存在全てが消えるべきとでも言うように弱々しい。

「め、迷惑なんかじゃないっ！」

思ったよりも大きな声が出て、広くはない部屋にキーンと響く。

「わたしこそ、ほんとにごめんね。こういうことはルームメイトなら確認したり気付いたりするべきだった。ねえ、わたしが、理解できることならなんでもわかりたいから、もっと相談してね」

頼って。奏美ちゃんにもっと頼ってほしい。力になりたい。これだけはきつと、ずっと変わらない気持ちだと思う。

（やってしまった。きつと彼女にも愛想を尽かされる。こんな面倒くさいルームメイトは私だって嫌だ。どうして忘れられないんだろう？）

忘れたかったから中途半端に記憶がないのだろう。両親も警察も、お医者さんの注意に従って私の記憶を無理に戻そうとはしなかったから、時間が忘却を促して、いつかもとに戻れると思っていた。

だけど、全部から逃げて何をしても、そんな日々はいつか壊れてしまうのだと私の中で警笛が聞こえる。一番忘れたかった恐怖ばかりが、今日も私に絡みついていた。

暗いところだけがどうしても怖い。そう言っていたけれど、自分それ以外にも奏美ちゃんには問題がありそうだった。

少しずつ彼女の嗜好を知ろうとしたけれど、好きな食べ物はないと言う。好きな歌も好きな場所もないと言う。楽しみなことや嬉しかったことを訊いても、答えが帰ってこない。

「奏美ちゃん、それで幸せなの？」

ある夜、薄明かりの中でつい訊ねてしまった。

「幸せなんて、ほしくない……」

低く掠れた返事が聞こえる。

「いらぬ。私、この方が落ち着くの」

それきり答えは帰ってこなかった。どういう意味だろう。考えてるうちに眠ってしまった。

目が覚めてもわからなかった。幸せになりたくない、なんて初めて聞いた。どういふことだろう。幸せが怖いとか？ それとも自分を貶めたいとか？ 何週間も考えた。でもよくわからなかった。

「夏堀、聞いてるか？」

「あ、聞いてません。ごめんなさい」

わたしが赤崎先生あかきの問いに正直に答えると、クラス中からさざ波のように笑い声が聞こえた。

「もう高校生なんだから、素直なだけで許されると思うなよ……」

担任の赤崎先生は中年のわりには若く見える優しい先生だ。中等部の頃から何回もお世話になっている。

「だつてえ……」

授業は真面目に受けるように努力しているけれど、週に一回く

らいはどうしても関係ないことを考えてしまう。とくに最近はず美ちゃんのことあつて、つい意識が授業そっちのけになる。

「聞いてません、ごめんなさいだけで済ませるって、やっぱり絆奈子はドライだね……」

隣の席の子がぼつりと言った。その言葉に数人が頷いている。

人付き合いがたまに冷たいらしく、ドライだとよく言われる。仕方ないじゃん、深入りするの苦手なんだから。

「こないだも情が薄いよねって言われてたもんね。アハ、ハハハッ」

二列ほど後ろを見ると、ケラケラと笑い声を上げる奏美ちゃんあきがいた。

奏美ちゃんは意外と豪快に笑う。口を大きく開けて見せることちまで笑つちゃうくらいの笑顔は、はつきり言えば美人が台無し。しかもツボも人とどこかずれてるし。何人かの子が見た目とのギャップに驚いていた。

でも、笑うのだ。笑うってことは、楽しいって気持ちが存在しているってこと。それならもつと奏美ちゃんには笑ってほしい。幸せになりたくないなんて嘘だと言つてほしい。

「それにしても笑いすぎだよ……」

複雑な心境である。奏美ちゃんは感情が死んでいるわけじゃな

いのだと希望を抱けるけれど。わたし今、すごくバカにされてる。

「授業に戻ってもいいか？」

赤崎先生の遠慮がちな質問で、やっと奏美ちゃんは笑いを堪える努力をした。真つ赤な顔で「はあ……」と息を深く吐いている。

教室はもとの静けさを取り戻した。もともと真面目で物静かな生徒が多いから、たまに年頃の少女らしくざわめいている教室を見て初めてここが学校なんだと認識する。調和を乱す人なんていなくて、教育者たちが求める理想の風景。それはここにあるけれど、上辺だけの架空の世界だとわたしは知っていた。

少女というものは無邪気で残酷だ。自分を正しいと信じながら他者を傷付ける生き物なのだ。わたしだけでなく、みんながそう感じているはずだし、逆にわたしもきつと誰かを傷付けている。だから表立って争ったりはしない。お腹の底にふつふつと小さな怒りを煮やして、でも受け入れてやり過ごして生きなくちゃいけない。毅然とした態度で振る舞って、それを容易く行える生徒がこの学園には多いのだ。

悪いことじゃない。そうすれば生きるのは簡単になるから。なのにわたしはそれが苦手で、根っここの部分で誰のことも信用できなくなっているのを自覚していた。

人を信じられない。だけど信じてみたい。その相手が奏美ちゃん

んになったらいいな。淡い希望が浮かぶ。

後ろ向きに全力疾走していく奏美ちゃんがもしも前を向けたら、わたしも変わる気がした。だからわたしは奏美ちゃんを変えてあげようって、こっそり決めたのだった。

「ひなちゃんひなちゃん」

ある夜机に座ってラジオを聞いていると、後ろから呼ばれた。

「なーに？」

奏美ちゃんとルームメイトになってから早一ヶ月、この時間はイヤホンを片耳にだけしてなんとなくラジオを聞きつつ、奏美ちゃんと話しながらのんびりするサイクルになっていた。

「課題終わった？」

少し気怠く間延びした声で訊かれ、こちらの返事もだらんと力の抜けたものになる。

「まだー。わたし、小学校の頃から夏休みの宿題は九月になってからが本番派」

授業の初回で提出の科目に関してはそれでなんとかなるものだ。悪い癖が今でも抜けず、わたしが課題を始めるまでにはかなりの時間が必要なのである。

「あ、私もそうだったよ」

悪戯つぼく笑う奏美ちゃん。へえ、なんか意外。

「奏美ちゃん、きちんとやってそうなの」

聡明そうな印象……というか実際聡明なのにも関わらず、思ったよりもズボラというかポンコツというか。彼女は掴み所がない。

「見た目と違うね」

「アハハ、よく言われる」

よく言われるのか……。うん、これは喋ると残念ともよく言われてきただろう。

「奏美ちゃんは課題終わった？」

左右に首を振る。校舎にいるときは清楚に制服を着こなしている彼女も、部屋着の薄いワンピースに身を包んでいると幾分か儂さが増して見えた。

「まだ。今日はなんとなく気分が乗らないの」

多分、毎日その言い訳をしてきたはずだ。身に覚えがある。でもわたしは親でも先生でもないし、彼女と同類だから咎めない。

「じゃあ奏美ちゃん、気分変えるために中庭でも行く？」

月が出ていて中庭のライトが消えない時間帯なら奏美ちゃんも外を歩けるらしい。中庭に出て歌を歌うのが好きと教えてくれた。彼女の口から初めて聞いた好きなものだった。やっぱりあるんじゃない、好きなもの。

「ひなちゃん、今日も来てくれるの？」

奏美ちゃんはわたしに優しくされることによく戸惑う。優しくされるのも、幸せになることと同様なのだろう。わたしから構うと、やたらびくびくされるのだ。ねえ、もつと受け入れてよ。裏切ったりしないから大丈夫だよ。

「行くよ。奏美ちゃんの歌聞くの好きだもん」

中庭は寄宿舎の真ん中であって、吹き抜けみたいに四角く空が見える。丘の上にあるこの寄宿舎から覗く空は近くて月も明るい。けれど月以上に明るいはライトで、背の高い木が植えられている四隅から、ライトの強い光が中庭全体を照らしていた。

光に包まれて奏美ちゃんは歌い出した。外国語の歌詞に綺麗なメロディで、誰のものかも知らない歌。わたしは奏美ちゃんが歌っているのしか聞いたことがない。教えてもらおうかとも考えたけれど、歌うのは好きでもあまり上手くはないのを思い出した。奏美ちゃんのを聞くだけで充分だった。

高音にピリピリと鼓膜が震える。彼女はどこで習ったのか、とても綺麗な歌声をしていて、わたしはその歌を聞くのが幸せだった。歌うことは二倍祈ること。シスターからそう聞いたことがある。奏美ちゃんは何かに敬虔な祈りを捧げているのかもしれない。そう思った。

歌っている奏美ちゃんは悲しそうな顔をしていた。本当に好きなことなら、笑って歌ってほしかった。好きなことが存在するのが悲しいのか、それともこれは本当は好きなことじゃないのか。よく笑うのに、魅力的な笑顔なのに、好きなことをするときには笑ってくれない。

笑って、と頼めばきつと彼女は笑ってくれる。でもそれは奏美ちゃんの笑顔じゃない。わたしが好きな奏美ちゃんの笑顔は、奏美ちゃんのための笑顔じゃない。常に誰かを安心させるために身を削って笑う笑顔。彼女は自分のためだけに笑ったりしない。

「ひなちゃん？ 眠いの？」

ほんやりしていたのだろう。奏美ちゃんが歌うのをやめて話しかけてくる。風が解いた髪が、羽が広がるみたいに薄着の肩に揺れていた。

「ううん、そんなことないよ」

「嘘だあ、外国語の歌詞がわからなくて眠くなっていたでしょ」
 ふくふくした指をわたしに向けて自信満々に言い放つ。確かに歌詞はまったくわからないけれど眠くなってなどいない。奏美ちゃん、わたしのことバカだと思ってるでしょ！

「んつとね、局地的にバカだけど局地的に賢いよね」

失礼なことをさらつと言う。でも、ポジティブに捉えるとした

ら、こんな冗談を言い合えるほどにわたしたちの距離は確実に縮まっていくってことなのかな。

「わたし、いつでも賢いよー」

別に話す内容なんて何でもいい。こうして会話を続けていることが心地良かった。

寄宿舎でも校舎でも一緒にいて、奏美ちゃんを通していろんな子と話しているうちに、クラスでふわふわと浮いていたわたしもだんだんと馴染むようになっていた。ずっと学園にいたわたしが転校生のおかげで馴染むなんておかしな話だけれど。

わたしが力になりたいのに、わたしばかり助けられてる。

「そろそろ冷えるし部屋に戻ろ」

わたしは右手を差し出して、奏美ちゃんの手を取る。わたしより冷たいけれど、あつたかい。確かに血が通って生きている、人の温かさだった。彼女が抱えているものが何なのかわからない。けれど、どうしようもなく愛しく、大切な友達になっていくのがわかる。今はそれで充分だった。

「また今度、中庭でお喋りしよう。約束」

「ええ、約束」

わたしのためにくれる微笑みは、やっぱりとても綺麗だった。どこか物悲しいから、綺麗に見えるのかもしれない。寂しいとき

ほど無理に笑う。それが彼女の強さで、わたしが嫌いなところだった。いつか、その笑顔を自分のために見せてほしい。

「私はいつからか寄宿舎の中庭へ出るのが好きになつていた。

夜だったら誰にも見られない。光があれば怖くない。なんて心地良いのだろうか。

不思議なことに私の奇行を前にしても彼女は私から離れていかないし、誰かに言いふらしたりもしていない。中庭へ出るときも一緒に来てくれて、話しかけたりはしないでそっと壁際に腰掛けて待っていてくれる。

優しくされることは怖かった。だけど私は弱くて、すぐに甘えてしまう。彼女の白い手に縋ってしまう。私には、こんな綺麗な手を取る資格なんてないのに。」

第三章

その日はどんよりした曇り空。別にいつもと変わらない日曜日。わたしはシスターと呼ばれていて、お御堂の掃除を手伝っていた。お御堂というのは簡単に言えば教会をうんと簡易にしたもので、白鷺のお御堂には十字架や祭壇、オルガンが置いてある。

壁に嵌め込まれたステンドグラス風の硝子細工を拭いて、木の

床を掃く。日曜の朝やクリスマスにミサで来るときは気付かない汚れが蓄積していた。夏服に衣替えした制服はクローゼットで留守番させ、動きやすいオーバーオールを着てきたから掃除が捗る。黙々と作業をするときに身軽だと、いつも以上にテンポよく進むものだ。

夢中になりすぎたのか、思ったよりも時間がかかったようであり、終わると夕方になっていた。けれど、疲れたときにお御堂は何よりの居場所だったから、ちつとも構わなかった。

「夏堀さん、ごめんなさいね、せつかくのお休みを」

シスターの一人が申し訳なきように頭を下げる。

「いえ、お構いなく！ わたし、頼られるの嬉しいですよ！」

嘘つぽく聞こえそうだけど、本音だ。心配なことがあるとすれば部屋に一人でいる奏美ちゃんのことくらい。なるべく急いで三一二号室へ戻った。

「ただいま……。え？」

ドアを開けて目に飛び込んできたのは見慣れない光景だった。バラやマーガレットや、ぱつと見は名前が思い浮かばない花が所狭しと咲いていた。いや、咲いているというよりは散乱していたという方が正しいかもしれない。とにかく、辺り一面花だらけになっていて、花畑の真ん中に白い服の奏美ちゃんがいた。

何よりわたしがびっくりしたのは、その奏美ちゃんの行動だった。彼女の薄い唇に、赤い赤いバラの花びらが啞えられていた。奏美ちゃんは花を食べていたのだ。

ひどく美しい顔で普通の食事をするかのように、手元の一輪のバラから一枚ずつ花びらを剥がしては口へ運んで咀嚼する。

花に囲まれて花を食べている。どう考えても異常な姿なのに、目が離せないくらい綺麗で、頭の中の止めなきやという警告を無視して見惚れてしまう。

「か……奏美ちゃん？」

後ろ手にドアを閉めて、張り付きそうになる喉から声を絞り出す。

「ひなちゃん？」

そこで初めてわたしに気が付いたようで、とろんとした目がこちらへ向けられた。

「このお花、どうしたの……？」

食べていることについては言及できず、とりあえずそう訊ねる。

「華道部が発注しすぎたお花をくれるって言うから、もらったのよ」

いやいや、「もらったのよ」って。奏美ちゃんがまるで日常会話みたいに言うから、わたしはどんな風に話を続けるべきか見失っ

てしまう。

「とつても綺麗でしょう？ だから、食べたなら私も綺麗になって、許されるのかなって思ったの」

いつもの奏美ちゃんが論理的に勉強を教えしてくれるときの喋り方。だけど内容は意味がわからない。

「許されるって何を？ 誰に？」

つい語気が強くなってしまったと、わたしを見て奏美ちゃんの表情が怯えに変わったことで気付いた。ああ、悪いことをしてしまった。

彼女は怯えながらも、躊躇いがちに答える。

「い、ここにしていることを。神様に」

「神様なんていないよ」

誰かに見られていたら、カトリックの学校に通っている生徒らしからぬ発言だと咎められるだろうか。でも今はもつと大事なことがある。

そんな風に奏美ちゃんを苦しめるだけの神様なんていない。奏美ちゃんは悪いことなんてしてない。そのまま許されてる。そう伝えたい。だけど全部説明しても、きつと今の彼女には届かないから。

わたしはただ奏美ちゃんのそばに行つて、そつと手を繋いだ。

あなたがここで生きることを、わたしは許すよ。

そう伝わりますように。神様がたとえいなくても、わたしがいる。それだけがわかってもらえるなら、他のことなんて伝わらなくていいから。

奏美ちゃんの手は少しだけ汗ばんでいて、ひんやりと冷たくて、柔らかかった。手のひらから伝わる鼓動がわたしたちの全てだった。

「ひなちゃん……」

「ごめんね、と奏美ちゃんの口の形が動き、切れ長の瞳に涙が膨らむ。

「いいよ」

生きていていいよ。幸せになつていいよ。わたしが許すから。

「そう言われると怖いなあ」奏美ちゃんは深く息を吐いた。植物の青臭さが混ざつたバラの香水のような香りがした。「ひなちゃんがわたしを認めてくれることが怖い」

「怖くなんてないよ。わたし、全知全能の神だから」
戯けてみせると、奏美ちゃんは首を横に振る。長い髪同士がこすれて衣擦れみたいな音がした。

「そういうことじゃなくて。ひなちゃんといると、こんな私でもすぐにでも幸せになつちやいそうだから怖い。幸せになりたく

ないわけじゃないよ。でも、いぎ目の前に希望があると幸せが怖くて仕方ないの」

それは囁くような声だつたけれど、私の中でやけに反響した。

わたしは、ずっとその言葉が聞きたかつたんだ。ずっと幸せになれと押し付けてる気がしていた。奏美ちゃんが本当に幸福を拒んでいるわけじゃないつて聞けたから、ほつとした。

「大丈夫。わたしといても大丈夫だよ」

しばらくの間そのままの体勢で時が流れた。

部屋を片付けて、溢れんばかりの花々は近所の部屋におすそ分けをした。わたしたちの三二二号室にはバラとかすみ草が数本残つただけになつた。けれど、どことなく他人の部屋のような香りがしている。というか植物園の香り。

「植物くさい……」

「ごめんささい……」

思わず咳くと奏美ちゃんが叱られた仔犬のように萎れてしまった。

「あ、ごめんつ、聞こえてたなんて……。いや、つていうか奏美ちゃんのせいじゃないから」

「そんなに慌てたら墓穴掘るだけよ」

あ、やっちゃった。テへ、とわざとらしく頭を掻くと、奏美ちゃんは大げさに溜息をついた。もう気にしてないみたいだった。気にしてないなら、それが一番だ。奏美ちゃんはもつと自分自身にもテキトウになるべきなんだ。

「美味しいとか美味しくないとかじゃなくて、綺麗になれるかなって思ったから食べた。それだけだったけれど、私を見た彼女がひどく悲しそうな顔をしたから、そこで初めて悪いことをしたのだとわかった。

善悪の区別くらいいつているつもりだけど、私の調子には波があるらしく、今日はすごく不安定だった。

それでもこんな私を見捨てない人がいる。怖いけれど嬉しくて、泣きそうになる。」

放課後の教室になんとなく残っていると、さざ波みたい聞こえてくる同級生の声が入る。ぼうつと聞いていると、彼女たちは行ってみない場所について話しているようだ。普段、寄宿舎から外出する機会の少ない白鷺の生徒らしい会話かもしれない。

「北美原海岸？」

「そう。星空が綺麗って聞いたの」

「星ねえ。緋奈子ちゃんは星って好き？」

急に話を振られ、反応が一拍遅れた。

「ほ、星？」それほど考えたこともなかったけれど。「わたしは普通。でも、奏美ちゃんは好きそうだなって思う」

直接聞いたことはない。だけどきつと彼女は好きだと思った。

夜は暗いから純粋な星空を見ることは叶わないのだろうけれど。

「あー、織部さん、たしかに綺麗なものが似合いそうだよね」
納得したように頷く級友たち。

「その海岸、雨が多くてなかなか晴れないから星空に出会えることも少ないらしいよ」

「じゃあ見られたらすごくラッキーだね」

小鳥たちが囀るような、夢をみる乙女たちのお喋り。小説の中みたいに技巧的な気がして、昔なら自ら線を引いてしまっただろう。最近やつと、周りに合わせながら本音を出すことを覚えた。

それに、いかなる話を聞いても奏美ちゃんと関連付けるだけ、ぐつと世界に色が付く。たとえば今なら、その海岸に彼女を案内したらどんな反応をしてくれるかな、とか。想像するだけで楽しくて、北美原という地名を教えてくれたクラスの子に感謝すらしてしまふ。

「わたし、そろそろ帰るね。それじゃ」

ロッカーからスクールバッグを取り出して教室を後にする。

校舎の下駄箱で靴を履き替えていると、奏美ちゃんと赤崎先生が通りかかった。

「織部、大丈夫そうか？」

「はい、つつがなく過ごせてます」

「何かあったら、僕にじゃなくてもいいから言うように」

はい、と頷く奏美ちゃん。赤崎先生は奏美ちゃんの事情を知っているようだ。そうやって気にかけても、彼女は誰にも本音を語らないだろう。自分の中で燻らせてしまう人だ。

と、奏美ちゃんの視線がこちらを捉えた。パツと顔が華やぐ。

「ひなちゃん！ まだ校舎に残ってたのね。一緒に帰ろ」

少なくともわたしには心を開いてくれたと思つていいのだろう。ちょっと嬉しくて、全力で笑顔を返す。

「残つてたよ。もう先生と話はいいの？ なら帰ろう」

「……うん」

空気が抜けた風船みたいに、嬉しそうな表情はどこかへ隠れてしまった。まだまだ彼女が幸せを受け入れるには時間が必要なのかもしれない。

校舎の外はすっかり夕方の色に染まっていた。太陽は静寂に降り注ぎ、わたしたちは黙つたまま肩を並べて歩いた。二人でいる

ことは優しい孤独に浮かんでいるようで、切ないけれど妙に安心できた。

寄宿舎に戻ると、夕食まで談話室で話さないかと安斉からメールが入った。することもなかったため二階中央にある談話室へ向かうと、五人ほどのクラスメイトが好きな賛美歌は？ という女子高生にしてはいささか珍しい話題で盛り上がっていた。おそらく歌なら何でも大好きであろう奏美ちゃんがノリノリで参戦するから、わたしも自然と巻き込まれる。

「賛美歌ってクリスマスマサで歌われるもののイメージが強いですよね」

「夏より冬っぽいってこと？」

安斉の言葉に茉宏ちゃんが訊ねる。たしかに、これから梅雨が明けたら蒸し暑い夏だ。

「今の時期なら七夕だよね」

わたしは何の気なしに発言した。

「もお、ひなちゃん。それじゃあ賛美歌の話から遠くなるし、ましてや七夕なんて百八十度違うジャンルのものじゃない」

奏美ちゃんが呆れたように言うと、安斉もうんうんと頷いた。

「ミサは洋風だけど七夕は和風ですもんねえ」

「んな食べ物みたいいな……」

茉宏ちゃんのつつこみによって、わたしたちの頭の中でミサと七夕がレストランメニューの様相を呈した。

話が散らかったなどと言いつつも誰もが楽しそうだ。ずっとこのままであいられたらいいのに。

（救われてしまう。それこそが一番怖いこと。手に入れた幸せなんて、すぐに失ってしまう。）

私は、ずるい。

私は私が許せない。

第四章

「どうしよう、ひなちゃん。校舎に忘れ物しちゃった」

深夜一時を回った頃、泣きそうな顔の奏美ちゃんがわたしのベッドに飛び込んできた。

うーん……。眠い。

わたしは一度寝てしまうと起きるのが苦手だ。それが朝でも夜でも苦手。今日は珍しく早く眠りについたので、タオルケットの上から奏美ちゃんに乗っかられてだんだん目が覚めてきてしまう。

奏美ちゃんまだ起きてたの？

「ちよつと書き物してて。そんなことより、私、教室のロッカーに聖書を置いて来ちゃったのよ」

聖書？ たしかカトリック倫理のレポート用に上級生に借りてたやつか。明日の朝、食堂で返すって言ってた……。

「ああ、このままだと朝食の時に返せないってことか」

「そうそう。お願い、取りに行きたいからついて来てくれないかしら？」

わたしは欠伸をしつつ奏美ちゃんをベッドから退かして、それから一言。

「明日じゃダメ？」

「だって朝返すって約束したから。朝早く起きて校舎に行くのも考えたけど、それだと守衛さんが来る時間だから見つかりやすいと思うし」

変なところで律儀というかなんというか。奏美ちゃんはこういう時に面倒くさいくらい真面目だ。

奏美ちゃんも悩んだのだろう。言ってることは身勝手だけれど、顔を見ると今にも泣き出しそうだった。暗い夜の校舎に一人きりで行くことは彼女には酷だ。このお願いは人に迷惑をかけないためのお願いであって、彼女の望みではないんだなあと、ふと思った。

「わかった。行こう」

わたしは起き上がると、パジャマ代わりの長いシャツを脱いで学校指定のジャージに着替えた。夜の闇に紛れるには紺色のジャージが一番だと思ふ。奏美ちゃんにもジャージに着替えることを強要し、柵の隅にしまつてあつた懐中電灯のスイッチが入ることを確かめる。靴は運動靴でいいだろう。

寄宿舎をジャージ姿で歩くのなんて初めてだ。どこかの洋館みたいな風景にジャージのわたしと奏美ちゃん。不自然に目立つ。普段生活している場所なのに、ひどく場違いな存在に思えてくる。小さな子がシールブックの動物園のページに魚のシールを貼つてしまつたみたいな、あの感じ。

廊下の突き当たりの非常階段から非常口へ出て……。どこによいよと作戦を反芻しながら歩いてると背後から声をかけられた。

「どこ行くの？」

「うつひゃあー！」

このバカみたいに大きな叫び声はわたしではなく奏美ちゃんのもの。つまり声をかけてきたのはわたしでも奏美ちゃんでもない第三者。ゆっくりと振り返る。

「委員長っ」

長い髪に細くすらりと伸びた肢体。彼女はわたしたちのクラスの委員長を務める葛木理生さんだ。

「話し声がすると思つて見てみたら出歩いてるんだもん。寄宿舎の外に出たらシスターにめっちゃくちゃ怒られるよ？」

目尻を吊り上げて注意してくれるけれど、仕草と声が可愛くてあまり迫力がない。迫力なくても我々が委員長の言うことなので反論できずに、わたしは口籠つてしまう。

「待つて理生。何か事情があるのかも。聞いてあげようよ」

そう言つて委員長の後ろからまつたりと登場したのは、彼女のルームメイトである寢屋川未耶ちゃん。委員長も未耶ちゃんも今年初めて同じクラスになつたので、まだあまり話したことがない。

「未耶、起きてたの？」

「理生が出て行くの見えたから後つけてきちゃつた、へへ」

ほんわか雰囲気飲まれ、その場の全員が和んでしまひそうになる。委員長が慌てて軌道修正を図つた。

「事情だよ、事情。夏堀さんたち、何かあつたの？」

「えつと……。教室に忘れ物があつて、明日の朝までに取つて来てたくて……」

人によつては大したことじゃないこの事情。でも上手な嘘が浮かばず素直に答えてしまつた。後ろから奏美ちゃんがドキドキしているのが伝わってくる。

「そうだなあ。校舎の一階は美術室の右から二番目の窓が枠ごと

外せるけど、他からは入れないはず。あと、職員室を突っ切ることは鍵が頑丈でできないだろうから、三階を回らない限り不可能かな」

「え？」

ぼかんと口を開けるわたし。委員長は特に続ける様子もない。すると未耶ちゃんがにこりと笑った。

「忍び込むんでしょ？ ならこのコースがいいと思うよ。見つかったりしたらクラスの信用にも関わるから、忍び込むなら首尾よく行ってもらわないと委員長は困るのだよって言ってるんだよー」

その言葉に愛らしくウインクを決める委員長。彼女がこんなにお茶目で寛大な人だったなんて驚きだ。肩書きと成績に萎縮して関わるのが少なかったけれど、これからは先入観を捨ててべきかもしれない。

「あ、ありがとう」

「気を付けてねっ」

未耶ちゃんがファイティングポーズでお見送りしてくれる。彼女は委員長のルームメイトになるべくしてなったのだと思った。互いに相手の欠けたところを補う、唯一の人。嫌味もなく思いやっ

その後、非常口から寄宿舎を出たわたしたちは無事に校舎にたどり着いた。

「本当に美術室の窓って外せるのかな？」

小声で呟くと、奏美ちゃんが睨んできた。

「ひなちゃんは人を疑いすぎ」

そんなこと今更言われても、長年かけて閉じた心は簡単には開けない。裏があるかもしれない、嘘かもしれないって、いつでもわたしは裏切られたときのための予防線を張ってしまう。

わたしがむすつとしているうちに奏美ちゃんはスタスタと美術室の裏へ回り込み、右から二番目の窓枠に手をかけた。

「ほら、ちゃんと外れるよ。ううーん」

外れると言っているわりには力がなさすぎて、窓は僅かにしか動いていない。身長半分くらいもある大きな窓だし、位置も高いから仕方ないか。

「一緒にやるよ」

わたしも手をかけてぐらぐらと揺する。ガコンと小さく音を立てて枠ごと外れてくれた。そつと地面に下ろし、懸垂の要領でよじ登る。見つからないようにそれとなく窓をもとに戻したら、いざ出発である。

白鷺の校舎は硝子張りのせいで向こう側が見えてしまうから、肝試しには向いていないなと思う。石の壁さえ挟まなければ懐中電灯の光が漏れてしまう。外側に面した窓から光が見えたら、正門近くの見張り棟にいるシスターに見つかる。

しかし懐中電灯を消すのは奏美ちゃんにとって死活問題に値する。一階北の美術室から正門と遠い東側の廊下を通り、北階段で三階まで上がることにした。

校舎は無人のはずだが、夜中という状況がそうさせるのか、息を殺して進んでしまう。わたしの腕にしがみつく奏美ちゃんが浅く呼吸する音だけが聞こえていた。三階は化学室や物理室、音楽室などの通常の教室ではできない授業のための部屋が並んでいる。化学室の人体模型や骸骨がこちらを眺めていた。ますます強く奏美ちゃんがしがみつく。普段のへなちょこ体育を見ていると、どこにそんな力があるのか不思議になるほどだ。

「奏美ちゃん、このままだとわたし鬱血する」

「ひ、ひなちゃん冷たい」

抗議するように睨んでくる切れ長の目が潤んでいる。強気なのか弱気なのかわからない。

「しがみつくのはいいいから力緩めて。置いて行ったりしないか

51

交渉の結果、洪々力を緩めてくれる。

二階の職員室が占めている範囲を三階の廊下を進むことで道を稼ぐ。南階段で二階の南側に下りれば目的地である一年桃組の教室に到着だ。

三ヶ月ほど授業を受けた教室も昼間とは印象がガラリと変わる。見慣れた光景のはずが、暗いだけでどうも違うのか。

わたしから懐中電灯を受け取ってロッカーを探していた奏美ちゃんが、「あつた」と小さく声を上げる。聖書は無事に見つかったらしい。

「ほら、帰ろ」

わたしたちの部屋に帰ろう。明かりを点けてお喋りしても怒られない三二二号室が待っている。

「あつ」

短い悲鳴と共にカツンと音がして、それまで灯っていた小さな光が消えた。奏美ちゃんが懐中電灯を落として、電池が飛び出ってしまったのだろう。

わたしはすぐに電池を探そうとロッカーのそばまで手探りで進む。暗くてほとんど何も見えない。

「奏美ちゃん、大丈夫だよ、すぐ点けるから」

「……助けて」

ああ、遅かった。一瞬でも真つ暗になったら、遅いも早いもないのかもしれないけれど。声と気配の位置からして、奏美ちゃんはロッカーの前で震えながら座り込んでいるらしい。

「ごめんなさい、ごめんなさいっ。助けてください、お願い……」

明かりを確保することが先決だ。呪文のように繰り返される悲痛な叫びの中で、できる限り急いで単四電池三つを拾い集め、懐中電灯を再び灯らせる。小さなスポットライトの光の中に、顔を覆って蹲る奏美ちゃんが浮かび上がった。

腰が抜けたように動かない奏美ちゃんを立たせようと手首を握る。

「い、いやっ」

拒絶の言葉と共に手を振り払われた。明かりさえ点けば、もとに戻ると思っていただけに驚いた。

涙で濡れた瞳が怯えるようにわたしを見ている。その目に映るわたしは、彼女の敵？ それとも友達のひなちゃん？ どつちかな。

「奏美ちゃん」

「ひ、ひなちゃん……」奏美ちゃんの目の焦点が次第に合つてく

る。「ごめんね、私……。ごめんなさいっ」

わたしをわたしと認識した上で、奏美ちゃんはしくしくと泣き出した。わたしの右手は、振り払われたまま空中で呆然としていた。しばらくすると奏美ちゃんは、ゆっくりと話し始めた。わたしではなく自分に言い聞かせるように、そつと静かな声だった。

「私ね、少し前にととても怖い思いをしたの」

少女誘拐監禁事件つて覚えてる？ 一年くらい前の。

その言葉を聞いただけで、頭の中からハンマーで打ち付けられたみたいな衝撃が体を貫いた。おぼろげながらも記憶にある嫌な事件だった。目眩がした。吐き気も頭痛もして、それでもわたしは理解して受け入れようと、奏美ちゃんの話に耳を傾けた。

かいつまむと、奏美ちゃんは都内で起きた誘拐監禁事件の被害者だった。今から約一年前に連続少女誘拐犯に連れ去られ、約一ヶ月を犯人の自宅に監禁されて過ごしていたらしい。

犯人は十代前半の少女を誘拐し、飽きた頃に殺すのを繰り返していた。奏美ちゃんの前で誘拐されていた少女は三人いたけれど、いずれも彼の自宅の中で殺され、庭に埋められていった。彼女もいよいよ危なくなつたときにようやく警察が犯人を特定。間一髪で逮捕に至り、奏美ちゃんは保護された。

被害者少女の名前は未成年というのもあり表向きの報道では伏

せられていたけれど、わたしもこの事件のことは知っていた。まさか、その被害者が奏美ちゃんだなんて思わなかった。

奏美ちゃんは嫌なことばかりの地元から離れるために、全寮制の白鷺を選んで編入試験を受けたわけである。わかりやすく要約され、他人事みたいに俯瞰的になった事件の話が終わり、彼女は最後に付け加える。

「……警察の人からそう聞かされた。私は覚えてない。思い出したくもない。このまま忘れたい」

つまり、事件の詳細な記憶がないらしい。そしてそれを頭の奥に閉じ込めようとしていて、だけど体は忘れられずに闇を拒絶するのだと言う。監禁されていた間に何があったのかも、多くは報道されなかった。ネットでも憶測が飛び交うばかりで、どれも信憑性に欠ける。でもきつと、奏美ちゃんは立ち直ってなんかいないくて、だから今も、暗闇に怯え、幸せを拒むのだ。

「暗くなると、あの場所に戻るみたいで私、おかしくなるの。黙っていきましょうかと思っただけど、きつとこれ以上は無理よね……」

濡れた瞳がわたしを見た。その表情は、まだわたしに怯えているように見えた。

「奏美ちゃん、帰ろう」

わたしは奏美ちゃんに触れることもできず、ただ彼女が落ち

て立ち上がるのをそこで待った。触れてまた拒まれることが怖かった。

彼女がずっと秘密にしていたことを開けて、妙な話だがほっとした一面もある。むしろ、薄々想像していたトラウマの原因そのものより、奏美ちゃんが縋ってくれなかったことに、わたしは傷付いたみたいなのだった。

〈正直、私はすべてを覚えていて、何も覚えていなかった。何日も何日も閉じ込められたあの暗い部屋の匂いも、冷たい床や一度の食事の味も覚えている。でも、誘拐犯が一人だったのかも、どうやって助けられたのかも、どうして私が閉じ込められたのかも覚えていない。

忘れたはずだった。なのに。

今は誰も怖くなんてないのに、震えが止まらなくて、涙が溢れた。きつと私はもう普通になんてなれないのだ。

どうして少しでも希望を見つけてしまったなんて感じたんだろう。私は幸せを望んだりしてはいけないのに。……幸せになりた

いのに。〉

第五章

「緋奈子さん、アイス食べませんか？ 食べたいですよね」

アイスか。

「あ、どっちでもいって顔しましたね。私、購買部で自分と兼宏さんのアイス買ってくるので、ついでに緋奈子さんの分も買ってあげようと思ったのに」

またわたしは考えが顔に出ていたらしい。

それにしても、こんな暑いのに安斉は元氣だ。寄宿舎の部屋はもちろん、談話室もクーラーこそ効いているけれど、窓の外に見える熱気越しの歪んだ景色が気を滅入らせる。いつも町から遠いとは感じるけどますます遠く感じる。今すぐ町まで買物に行けと言われたら理事長命令でも断るだろう。

ありもしない命令を頭の中で断っているうちに、安斉は走り去っていた。

いつの間にか季節はすっかり夏になっていた。春学期の期末試験も終わり、あとは終業式を待つだけ。学園の生徒たちは帰省の準備を始めている。わたしはというと、帰省の支度も早々に終わり、談話室へラジオを持ち込んで聞きながらいたら。三一二号室には、なんとなく居辛い。

奏美ちゃんはあの夜以来、笑うことが少なくなった。日記もあまり書かないし、わたしが話しかけても上の空。委員長たち以外に見つかることもなく、無事に帰還できたというのに……。

わたしはわたしで、夜の校舎で振り払われた手の感覚がまだ抜けない。人に拒まれたと文字通り、肌で感じた瞬間だった。

せめて謝らないでほしかった。奏美ちゃんがあそこで謝らなければ「ああ、まだ混乱してるんだな」と納得できた。だけど奏美ちゃんは泣きながらなお、わたしの手を取ろうとはしてくれなかった。

わたしは結局、彼女にとつて他人でしかなかったんだ。ソファのクッションをぎゅつと抱き寄せて寝転ぶと、慌ただしく足音がして安斉が戻ってきた。普段のおっとりした雰囲気からは考えられないくらいすごいスピードだ。

「緋奈子さん、いちご好きですよねっ」

勢い良く差し出されるストロベリー味のソフトクリーム。購買部で百八十円。

「あ、ありがとう」

お金を払おうとするとやんわりと断られる。兼宏さんが待つので、とカップのアイスを顔の横に掲げてスキップで去って行った。安斉も気を遣ってくれているのだと思う。何があったと

も言っていないなくても、わたしが奏美ちゃんと一緒にいることが減ったのは、それほど仲の良くないクラスメイトたちも気付いているはずだった。

奏美ちゃんはわたしがいなくても他の友達がいたし、わたしは茉宏ちゃんたちと一緒にいることが多くなっていった。どちらかが孤立したら問題になったかもしれないけれど、わたしたちは自然にやり過ごせるくらいに大人で、ごく静かに距離を置いていた。「おはよう」や「おやすみ」以外にも会話はあつた。ルームメイトらしい関係は保っていたのである。心の距離だけが開いてしまつた気がした。

昔のことを聞き出すよりも、これからの未来を明るくしてあげたい。だけど拒まれたら、どうすればいいのかわからない。誘拐も監禁もされたことがなければ、それに匹敵するトラウマだつて抱えていないわたしは、奏美ちゃんの苦しさをわかつたつもりになるしかできない。

見つからない答えを探して、もがくほどにわたしはどんどん何かに絡め取られる。大人になれば答えが見つかるの？ それとも、答えが見つからないと大人になれないの？ そんな疑問が浮かぶこと自体、わたしはまだ子どもで、いかにも青春してるみたいに青くて。わたしの想いは青さを増していく。

仲が悪くなったわけでも、嫌いになったわけでもない。今だつて彼女が笑えるようになればと心から思う。でも、ただ一つの事実がわたしの心を埋め尽くして、そのせいでどうしようもなく彼女を遠く感じるのだ。

奏美ちゃんのことをわたしは救えない。彼女を幸せにできるのはわたしじゃなかった。

わたしは逃げた。

特急で二時間の隣の県にある実家に夏休みの間だけでも帰省することにしたわけだ。奏美ちゃんのことを忘れて、戻ったときには干渉しすぎないただのルームメイトになれるように。

実家が好きなのでもないけれど嫌いなわけでもなく、奏美ちゃんと違ってふらりと帰ることができたから家族を逃げ場所にした。

両親も妹も当分帰る予定のなかつたわたしの帰還に驚きつつも優しくしてくれて、十二年間暮らしていた戸建ての我が家は居心地もそれなりだった。

春休みに帰省をしたときよりも時間があつたため、小学校の頃の友達に会つたりもした。仲の良かった女の子も、みんなと合わ

せて少しだけ懂れてみたりした男の子も、わたしが見ない間にちゃんと高校生になっていた。この中から世話を焼きたくなる友達や、好きな人でも選んでみたら気が紛れるんじゃないか、なんて浅はかなことも考えた。けれど、それは効果なんて全然なくて、奏美ちゃんとの違いを見つけるたび、同じところを見つづけるたびに虚しさばかりが募った。

「お姉ちゃん、毎日出かけるわりにはつまらなそうだね」

ある日遊びから帰宅してすぐに、五歳も下の妹に言われ、わたしはまた顔に出ていたのだと自覚した。

「心ここに在らず、みたいなの。やり残してきたことでもあるみたい。宿題置いて来ちゃったとか？」

とても冷静で小学生とは思えないのに、宿題の話が出てくるあたりはまだまだ子どもだ。

「結衣子は可愛いなあ」

ふと本音が零れる。たまにしか帰らないわたしにも素直に話しかけてくれて、それって姉妹だから特別というか。他にはない関係の存在なのだ。

「全然話噛み合っていないよ、もう」

文句を言いながらリビングに麦茶を飲みに行ってしまった結衣子を見ていたら、突然気が付いてしまった。それは天からのお告

げみたいに、急激にわたしに落ちてきて、絶対に正しい答えだった。結衣子は、わたしにとって他にはない特別。それは姉妹だから。妹の代わりなんて、友達から探したりできない。

奏美ちゃんは、結衣子と同じなんだ。

わたしがなりたいのは、奏美ちゃんの友達じゃない。恋人じゃない。ついでに言えば、もちろん姉妹でもなくて。奏美ちゃんの、ただ一人になりたかった。そして奏美ちゃんにとつてのわたしも、そうでありたかった。

奏美ちゃんがわたしを拒んだことでショックだったのは、わたしが彼女を幸せにできない気がしたからじゃない。彼女の特別なただ一人になれなかつたから。慈愛とは程遠いエゴだった。

でも、だからこそやつぱり奏美ちゃんを救いたかった。こんなわがままのためだけに彼女を見捨ててはいけない。今度はきつと自分のエゴなんか左右されずに、変えてあげたい。もしもわたしが彼女の特別になれなくても、わたしにとつてはたった一人のルームメイトで理解者で希望そのものだから。

夏休みは終わろうとしていた。また寄宿舎で賑かな毎日が始まる。

今度こそ逃げない。

久振りに袖を通したセーラー服は、中等部に入学した頃のように体に馴染まなかった。少し伸びた髪は、相変わらずの癖っ毛。肩に着く前に切るか結ぶかしないとなあ。鏡の前で手早くスカーフを結びながら、そんなことを思った。

始業式の直前に寄宿舎へ着いたため、まだ誰とも顔を合わせていない。始業式にギリギリ間に合い、講堂に入ろうと整列する少女たちの間に澄ました顔で入れてもらう。出席番号の近い未耶ちゃんが、ニヤリとこちらを見た。「ギリギリセーフだね」と口バクで言っている。

奏美ちゃんはいらるだろうか。寄宿舎の部屋はわたしが帰省する前と何も変わらなかったから、退学とかはないと思うけれど。そわそわしていると赤崎先生が点呼を取る声が聞こえて、奏美ちゃんの返事も確認できた。

始業式や夏の課題の提出などを済ませるとすぐに寄宿舎へ戻れるようになったけれど、わたしは夕食までお御堂で時間を潰すことにした。

何もない日のお御堂はシスターが一人常駐しているだけで、学園の生徒は一人もいない。長椅子に座り、そっと目を閉じる。洗礼を受けたわけでもなく実は無宗教のわたしだが、お御堂にいると落ち着く。もつとも、落ち着くためだけに来たのではない。知っ

ている中で一番清らかで厳格な場所に行っても、この覚悟が揺るがないかを試したかったのである。

神様もイエス様もマリア様も、その誰にもできないことをわたしはしたい。守られ、隠れてこの場所にいることが、いくら居心地良くとも。

夕食を一人で急いで済ませ、三二二号室へ戻ってもルームメイ卜の姿はなかった。

ふと、月の下で歌っていた彼女を思い出して、中庭へ出てみる。

思った通り、制服のまままで彼女はそこにいた。明るい箱庭に繊細な歌声が響いている。やっぱり知らない外国語の歌だった。

奏美ちゃんはこちらに気付いて、歌うのをやめた。体を強張らせたのがわかる。最後に会ったときよりも痩せている気がした。わたしは黙って近付き、一メートルほどまで距離を詰める。奏美ちゃんは顔にこそ出さないけれど、細胞からわたしへの怯えが溢れていた。でもわたしは怯まない。

「ねえ、奏美ちゃん。外に行こう」

窮屈なこの世界から。あなたを閉じ込める過去から、外へ。

「どうして? どこに行くの?」

歌声よりも低く、警戒心を隠さない声。一ヶ月ぶりの奏美ちゃ

んの言葉は、確かな重みを持ってわたしの中に沈んだ。鋭くて、
 気を抜いたら心臓に突き刺さりそうだ。

「だけど、わたしは元気で無茶苦茶で、その明るさでしか誰かを
 助けられないと思うから。本当のわたしがやりたいことをしたい
 から。」

「学園を抜け出そう。奏美ちゃんに見せたい景色があるんだ」

真つ直ぐに目を見つめる。切れ長の目を縁取る長い睫毛が震え
 ていた。

「やめて」

また拒まれた。

「ひなちゃんお願い、私のことなんて助けしないで。やつぱり私、
 幸せになるのが怖い。ひなちゃんの近くにいたいのが、怖いよ……」

「それはわかっているよ。でも来てほしいの。お節介なのだって
 知ってる。これはわたしのわがままなんだ。わたしと一緒に星を
 狩りに行くこう」

返事を待たずに歩き出した。奏美ちゃんがついて来てくれたの
 が足音でわかった。中庭から寄宿舎の廊下へ入ったところで振り
 向くと、真面目な顔でわたしを見つめる彼女の姿があった。

荷造りなんてしていない。わたしも奏美ちゃんも、着ている制
 服と、携帯電話や財布が入っただけのスクールバッグしか持って

いない。だけど今すぐ行かなければ決心が鈍りそうだから。

学園の裏門にはこの時間は見張りがいない。規律を重んじる白
 鷺の生徒たちは抜け出すようなことをしないと信用されているの
 だろう。まあ、わたしは抜け出すけどね。寄宿舎ですれ違う生徒
 もシスターも、わたしたちがこれからしようとしていることなん
 て知らない。背徳感で気分が高揚していた。学園を夜に抜け出す
 という確実に悪いことをするつもりなのに、不安よりも楽しいの
 ドキドキが大きくて、わたしって不良の才能があるのかも、なん
 て思った。

第六章

木々の間の道を走り、今朝上ったばかりの丘を下る。学園から
 の逃避行は案外あっさりできるものだった。振り返ると緑の向こ
 うに暗い校舎とぼんやりと光る寄宿舎が佇んでいて、少しだけ後
 ろ髪を引かれた。

奏美ちゃんは文句も言わずについて来た。わたしが寄宿舎の方
 を振り返っても彼女が後ろを向くことはなかった。

町の大通りを歩いて駅へ向かう。人々は帰宅途中のサラリーマ
 ンくらいしか外を歩いておらず、穏やかで、いつもと何も変わら
 ない景色だった。中途半端に照らされた学園と町の夜は、いつで

もふわふわと明るくて、わたしたちの心の隙間を誤魔化してくれた。

「えっと、あそこに行くには、たしか美原^{みはら}行きの列車に乗るだけでいいはず……」

麓の町にある駅は改札も一つしかない小さな駅だ。せいぜい六両編成の電車か、もしくは列車としか言いようがない車体しかやってくる。いずれ線路だけが残されて、列車も来なくなるのではないかと思うくらいだ。

美原行きの赤い列車は、電車を二つ見送つてすぐにホームへ入つて来た。ボックス席で向かい合わせに座る。正面から見る奏美ちゃんは、なんとなく伏し目がちで、長い睫毛が柔らかい頬に影を落としていた。

どこの学校か一目でわかる制服を来て、堂々と列車で移動して、もしかするとすぐに捕まって連れ戻されるかもしれない。今のうちに何か話しておこう。

「日記、書いてた？」

わたしがおもむろに訊ねると彼女は首を横に振った。黒髪がさらさら揺れた。

「いつも書いてたのに。もうやめちゃったの？」

「書けなかったのよ」言葉と一緒に溜息が零れた。「ひなちゃん

といないと書けなくなつたみたい。日常に起きたことが、わざわざ書くほどのことに思えなくて」

「そんなにわたしのこと書いてたんだ」

久々の会話が嬉しくて、ついつい茶化してしまう。

「そうよ。白鷺に入つてからの私の生活って、ひなちゃんを抜くともも残らないくらい。ひなちゃんもそうでしょ？ 私が来てからは、ほとんど一緒にいたじゃない」

大真面目な顔で茶化し返してきた。

「そだね。じゃあ、夏休みは何してた？」

日記に書かないようなことだとしても、まさか毎日寝て起きてだけなはずないだろう。

「読書。来る日も来る日も読書。たまにクラスの帰省していない子たちと町でお茶して、帰りに本屋で小説買って、また読書の毎日」うわあ、ちよつとわたしには無理そう。顔に出たようで奏美ちゃんがくすりと笑つた。

列車は夜の帳を走る。がたんごとんとリズムを刻んで、加速しては次の駅に停車してを繰り返す。時刻は十時を過ぎていて、目的地まではまだ遠い。帰りの列車はもうないと思う。だけど構わなかった。

「私、色々考えたの」

今度は奏美ちゃんの方から話し出す。

「どうして、ひなちゃんの手を取れなくなったのか、考えたの」
続きを聞くのが怖い。けれど、わたしには次の言葉を持つこと
しかできなかった。

奏美ちゃんは大きく息を吸ってから躊躇いがちに、でもはつき
りと告げた。

「ひなちゃんだから、怖かったの」

わたしだから……？

わたしだから怖い。他の人では救えなくてもわたしなら助けら
れると思っていたのに、わたしだけが彼女に拒まれていたの？
彼女の言葉の真意が掴めなくて、体が嫌な汗をかく。

「ひなちゃんが私に優しいから。触れるだけで、ものすごく幸せ
になってしまっそうで。私のこと幸せにしてくれようとしているの
わかるから、早く平気になりたかった。でも、どうしても怖くて。
焦るたびにどんどん怖くなって」

奏美ちゃんはきつと、夏休みの間に本当にたくさん考えて言葉
をまとめてくれたのだ。詰まることもなく話を続ける。

「最近ではね、他の人に優しくされても、『この幸せを掴んでも
失うかも』なんて不安は薄くなっていた。だけど、ひなちゃんは特
別だったの。ひなちゃんがくれるものは、みんなよりずっと素敵

で……」

もういいよ。

「いいよ、奏美ちゃん。わかったから」

それだけで充分だよ。わたしじゃ救えなかったんじゃないなくて、
わたしだから怖かったんだって、ちゃんとわかった。

奏美ちゃんがくれた「特別」という響きは、あまりにも甘美な
ものだった。近くにいるのが怖いのは、わたしだけが特別だった
からだなんて。気付けなかったわたしはバカだ。

ちゃんと謝らなくちゃいけない。

「わたしこそ、ごめんね。もしまた同じようになったらと思っ
たら、わたしも怖かったんだ」

奏美ちゃんは困ったような笑顔で「知ってた」と一言。

そっか。気付いてて、わたしが怯えないでいいように、あまり
話さなくなったんだ。あの夜から彼女が口を喋むことが増えて、
それがどんな想いでいたかも知らずに、わたしは自分だけが悲し
いみたいな気分で過ごしていたのだ。

「ねえ、おあいこつてことにしよ？ ひなちゃんが帰省する前に
きちんと話し合うべきだったのよ。万が一この関係がもつと壊れ
たらと思っただけなかつた私は、とつてもずるいから」

わたしよりも口数の多い奏美ちゃんを久振りに見て、楽しかつ

た頃のことを思い出した。

「おあいこ？ そんな平等にしているの？ 相手のがずるいつて言っておけば、後々色々な要求をできるかもよ」

ああ、こんな大切なところで軽口を返す人間でごめんなさい。

「アハハッ、私はひなちゃんと違って守銭奴じゃないから」

あ、本当に久振りの、奏美ちゃんの笑顔だ。頬の高い位置にえくぼを作って、チープな表現だけれど向日葵みたいに笑う、わたしの好きな笑顔。わたしのために笑ってくれる、少し切ない笑顔。

「つてか守銭奴つて」

確かにわたしは欲張りだとは思う。この百分の一でも奏美ちゃんが欲張りだったら、きつと幸せだつて怖くないだろうに。守銭奴は認めないけど。

「わたし小さい頃から清らかだったからね」

「知らないわよ。私の小さい頃のが清らかだと思っし」

なぜか誇らしげに言ってくる。

「それこそ知らないよ。教えてよ、奏美ちゃんの記憶があるところまでで構わないから」

もつとたくさんあなたを知って、疑ってしまう心なんて追い出したい。

寄宿舎の部屋で布団をかぶって話したときより、中庭で話した

ときより、向かい合つて座るこの列車での会話は不思議なくらい途切れなかった。面と向かつてると話し辛いのが普通なのに。

「私、ひなちゃんと初めて会った日のこと覚えてるわ」

そこまでは小さな頃に好きだった遊びについて話していたのに、唐突に奏美ちゃんが話題を変えた。「三二二号室に来た日？」と訊くと、首を横に振る。

「編入手続きに来た日に、校舎から歩いてくるひなちゃんを見たの。冬で、まだ中等部の制服の上にコート羽織つてたはず。この子は誰だろうつてすごく気になったの」

もしかして、わたしが彼女を見かけたあの日を、彼女も覚えていたの……？ 同じ記憶を共有できていると知り、妙に勇気が湧いてきた。わたしもそのときのこと覚えてるよ。なんだ、わたしだけが知ってたのかと思つてた。

「断然知つてたわ。ひなちゃんは自覚ないみたいだけど、見た目も雰囲気も人目引くんだから。あんな寒い日にあんなにゆつくり外を歩くのなんて、ひなちゃんくらいよ」

独特な言い回しで強く言われた。断然知られていたらしい。もっと早く言ってみればよかった。何を話せばダメで何を話せば大丈夫なのか、見極めるのはなかなか難しいものだ。

一時間半くらい列車に揺られた頃、終点の一つ前の駅に着いた。同じ車両に乗っているのは老夫婦とおじさん一人だけになっていた。

「降りるよ」

わたしは自然と奏美ちゃんに手を差し伸べた。奏美ちゃんは少しだけ考えて、しかしすぐに手を取ってくれた。

二人で列車を降りる。北美原の文字がホームの柱に踊っていた。駅員さんに切符を見せて改札を出ると、目の前には暗い林があった。電気も駅の明かりくらいしかなく、林は鬱蒼としていてむしろ森のようだ。

「奏美ちゃん、ここに入るけど、大丈夫？」

ダメと言われたら駅の反対側の街へ出て宿泊場所でも探すつもりだった。強引に連れて来ておいて何だが、ここからは目的達成以上に彼女の気持ちが優先だ。

しかし、奏美ちゃんは力強く大丈夫と頷いた。強がっているわけでもないようだ。それならわたしは進むだけである。

林の中の小道は、長くくねり、外灯もない。足元を照らすのは木々の隙間から零れる月の光だけだ。手探りに近い状態で進みながら、左手に繋がっている奏美ちゃんを見ると怖がる様子も全くない。しつかりと自分の意思で歩いていた。

どこからか甘い香りがした。「クチナシの香りだ」と呟く奏美ちゃんの声が妙に艶っぽくて心臓が跳ねた。

わたしはいつかの花だらけの部屋を思い出した。あの日の奏美ちゃんがおかしいのに綺麗で、瞼の裏にまだ焼き付いて離れないのだ。神様に許されようとした奏美ちゃんを、わたしが許すと誓った日。

過去の回想に浸っていると、奏美ちゃんに質問を投げかけられた。

「ねえ、訊き忘れてたけど、星を狩るってどういうこと？」

「そのままの意味だよ」

星を探して、捕まえに行くのだ。神様の加護の届かない場所で、わたしが奏美ちゃんにさせてあげたいこと。優しく穏やかな寄宿舎での日々は、いずれ破滅に繋がっている気がした。そこから抜け出すために必要なこと。

納得してはいないだろう。でもそれ以上彼女は訊ねてこなかった。

晩夏の夜はまだ蒸し暑く、奏美ちゃんと繋いだわたしの手は少し汗ばんでいた。離すべきか逡巡して指の力を緩めようとすると、奏美ちゃんが強く握り直してきた。驚いて彼女の顔を見ると、力強い目が見返してきた。

「離さないでいいよ」

気にならないから、とわたしの思考を完全に読んでいる奏美ちゃん。心の距離は長い列車の旅のおかげか、もう元に戻っていた。

固い土の地面が、だんだんと歩きにくい柔らかな砂に変わっていくのを感じる。数十分ほど歩いて、足がもつれ始めた頃、ようやく開けた場所に出た。

そこは海岸だった。北美原海岸。クラスの子たちの会話で聞いたあの場所である。

誰もいない広い砂浜に、闇の中揺らめく水面が見え、ざわざわと波の音が聞こえてくる。見上げると、どこまでも深い空に、降り注ぐ雨のごとく星が瞬いていた。

隣で息を飲む音がした。

「こんな星空、初めて」

優しい、ソプラノの響き。美しい夜にぴったりの心地良い声が、彼女が感じたであろう感動を物語っていた。

「わたしもだよ」

わたしと奏美ちゃんが感じている気持ちは同じなんじゃないだろうか。わたしの知っていた綺麗な景色なんて、偽物だったのだと思い知ってしまった。今まで想像の中になかなかつた夢みたいな夜。絵や写真よりも大きく広い空に、眩しい星々に、ただ一言

しか紡げないわたしたちがいた。

「綺麗……」

砂浜に座り込み、うつとりと空を見る。

わたしたちだけしかない海。濃紺の絵の具を霽した上に、宝石の入った袋をぶちまけたような星空。プラネタリウムなんかじゃ勝てない。言葉では言い尽くせない空が広がっている。星明りで奏美ちゃんの顔が確認できるほど明るい。

本当はいつでもあつたはずなのに、学園にいたら気付けなない。自分でここまで来ないとわからない光景だ。

ひなちゃん、と小さな声に呼ばれた。

「面倒な過去があつて、記憶も少しなくて、得体の知れないこんな私のことなんて信じられないだろうけど。私は信じてほしい。もつとひなちゃんにわかつてほしい」

彼女はそこで言葉を区切ると、わたしの手をきゅつと握つてきた。ひんやりと冷たくて柔らかい。規則正しく伝わってくる鼓動が、奏美ちゃんの揺るがない決意のように思えた。

奏美ちゃんは手を握つたまま視線を上げ、真つ直ぐに見つめてきた。曇りのないその瞳に、わたしは黙つて次の言葉を待った。小さく息を吸う音がして、一言。

「一緒にいたい」

それは、奏美ちゃんの口から聞いた初めての、要求だった。彼女が初めて自分のために何かをほしいと思ってくれた瞬間だった。

いいよ、と答える代わりにわたしは隣に座る彼女の肩に頭を凭れた。奏美ちゃんはわたしの顔を覗き込むように首を傾げて、微笑んだ。はにかむような、そっと手のひらに渡すようなその笑顔は、わたしが見たかった奏美ちゃんのための笑顔だった。

喋ると泣いてしまいそうなくらい嬉しくて、なんて言えばこの気持ち伝わるのかわからなくて。無数にある言葉の中から何も選べずに、心地良い沈黙に抱かれながら、わたしたちはそこにいた。

クチナシの甘い香りが鼻腔をくすぐる。宇宙が透けているのではないかと、いほど深い夜空に、ベガとアルタイルを見つけた。七夕を過ぎてても織姫と彦星は惹かれ合うのだと、妙なことを考えた。

「あ」
 そう声を発したのは、わたしだったか、奏美ちゃんだったか。黒い影のような雲が星々を隠すように広がり始めているのを見つけたのだ。この辺りは気候が変わりやすいって聞いたもんなあ……。みるみるうちに雲が夜空を覆い、突然大粒の雨が降り始めた。

「きゅーっ」

悲鳴をあげつつ、わたしたちは雨宿りができそうな場所を探して駆け出す。ようやく見つけた海の家はシャッターが閉まっていた、無理やり軒先に収まるしかないけれど、これ以上濡れるよりマシだ。

奏美ちゃんが苦笑いをしたのがわかった。制服びしょ濡れだわ、風邪引かないといいけど。独り言のように呟いている。

目を凝らすと、彼女の黒いスカートのプリーツが滑らかな太ももに張り付いていた。長く綺麗な黒髪も、濡れて雫が滴っている。まるで絵の中から出てきたみたい。美人は何をしても美人だ。いやいや、今はそれどころじゃないか。

「つていうかこの後どうする？ 助け呼ぶ？」

自分で学園を抜け出しておいで迎えに来いと連絡するなんて馬鹿馬鹿しいと思いつつも、身動きが取れないのではどうしようもない。

「うーん、これは私たちは当然だけど、委員長も赤崎先生も怒られるコースよね」

奏美ちゃんの言う通り。それどころか、下手したら学園を追放されるかもしれない。

「もう、どうせバレーでそうだし。葉宏ちゃん辺りにメールしてみるか」

もう運次第でいい。成り行きでなんとかしてみせる。寄宿舎を追い出されたら、奏美ちゃんには夏堀家に来てもらおうかな。わたしは空想の中の新しい生活に頬を緩ませた。

「笑つてないで。メールするならちゃんとして」

奏美ちゃんの切れ長の目が鋭くこちらを睨んできた。

「テへ、ごめーん」

手を伸ばせば届くほど近くに彼女がいる。だけど、もう戸惑わない。

誰だって、心を傷付けずに心に触れることはできないのだ。人は無力なものだけれど、受け入れて、もがいて、求めながら生きていく。

草木も眠る丑三つ時をとくに過ぎて制服も乾き始めた頃、学園から迎えの車が来て、シスターにこつぴどく叱られながら帰路についた。どうやらお御堂の掃除を一ヶ月担当すれば学園に言わずにいてくれるようで、わたしたちは寄宿舎に戻ることを許されたいらしい。

見慣れた寄宿舎、落ち着く三二二号室へ戻ると、窓の外は明るくなり始めていた。疲れのあまり、制服のままベッドに倒れ込む。

「もう幸せは怖くない。」

ふと訊ねると、同じように自分のベッドに倒れ込んだ奏美ちゃんから小声で返事が来た。

「まだ怖いけど、大丈夫」

「少しずついいからね」

眠りそうな意識の中で呟く。

「ありがとう」と聞こえたのは現実なのか、夢の中か。はたまた気のせいかもしれない。まあいいや。明日起きたら訊いてみよう。この寄宿舎で、彼女との新しい日々が始まるのだから。

終章

日記はしばらく日付が飛んでいて、ちょうど最初に見えたページになった。

あれから随分と時が流れ、わたしたちを取り巻く環境も変化を重ね、それでも出会ってから最初の一年の記憶は強烈に残り続けている。懐かしさに飲まれるように青い日記帳を胸の前で抱き締めたとき、唐突に携帯が鳴り秋の夜の静けさを裂いた。

「うわっ、もしもし」

『ひなちゃん、まだ起きてるってことはやっぱり私の日記持って行ったでしょう?』

奏美ちゃんの声は怒っているというよりも焦っているようだ。

「バレたか」

『バレてるわよ。何年の付き合いだと思ってるの。もう……。ずっと見せないでいたのに、恥ずかしい……』

最後の方は消え入りそうな涙声になっている。

「大丈夫、一人で懐かしんで回想に浸っておいたから、蒸し返したりしないよ」

全然大丈夫じゃない！ と夜中には相応しくない叫びが聞こえた。

多分笑って許してくれるくせに。と心の中で茶化しながら、奏美ちゃんの満開の笑顔を思い出した。

彼女は今もあの日と同じように、とても可愛く笑う。

（その夜、私は彼女と一緒に星を狩りに出かけたのです。

隣を歩く彼女の顔は見えないけれど、怖くなかった。暗がりをお怖くないと思えたのは初めてだった。

小道を抜けて明かりがない海岸へ辿り着いて、何かを探して上を見上げたら、そこには目の覚めるような星空が広がっていた。

たかさんの星があることを、明るい場所にいた私は知らなかった。気付かなかった。当たり前前にそこにあつたのに、見えていなかった。

求めなければ見つからないのだ。けれど、欲しがる権利は誰にでもある。自分で手を伸ばせば光が見える。街なんて飛び出して、出かけよう。

焦らず、ゆっくり、ホシガリに。